

## 今週の為替相場見通し(2019年2月4日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.49 ~ 109.75	109.49	108.30 ~ 110.50
ユーロ	(ドル)		1.1390 ~ 1.1514	1.1453	1.1300 ~ 1.1500
(1ユーロ=)	(円)		124.39 ~ 125.73	125.43	124.00 ~ 126.50
英ポンド	(ドル)		1.3044 ~ 1.3214	1.3082	1.3000 ~ 1.3200
(1英ポンド=)	(円)	*	142.08 ~ 144.74	143.22	142.00 ~ 145.00
豪ドル	(ドル)		0.7138 ~ 0.7295	0.7248	0.7100 ~ 0.7450
(1豪ドル=)	(円)	*	77.96 ~ 79.61	79.38	78.00 ~ 81.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

為替営業第二チーム 山本 一暁

(1)今週の予想レンジ: 108.30 ~ 110.50 円

(2)ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

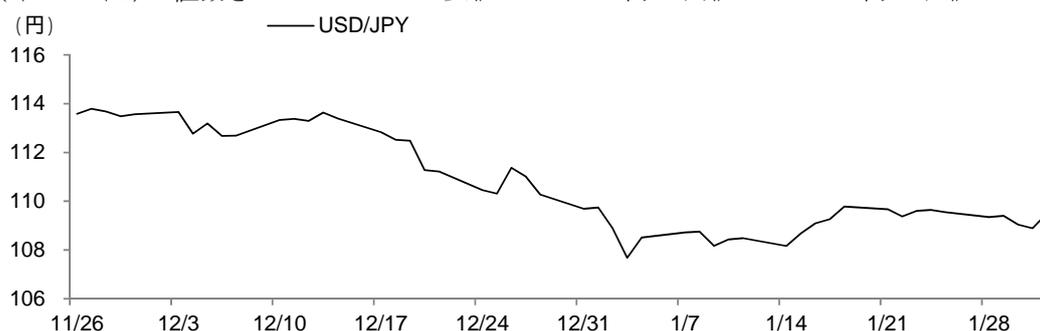
先週のドル/円相場は下に往って来いの展開。週明け28日、前週に一部米紙が報じた「FRBがバランスシート縮小の見直しを検討」が米金融正常化のペースダウンと解釈され、ドル/円は109円台半ばでスタート後、じり安の展開。ただし、週中にFOMC、米中通商協議、米雇用統計等の重要イベントを控えていることから下値も限られた。29日は特段材料が出ない中、109円台前半で揉み合い推移。30日北米時間、米1月ADP雇用統計が市場予想を上回り金曜発表の米雇用統計に対する期待感が高まったことから、ドル/円は一時週高値となる109.75円まで上昇。注目のFOMCは、声明文で「徐々に利上げ」、「リスクはおおよそ均衡している」等の文言が削除されたことがハト派的と捉えられ、ドル/円は109.11円まで反落。パウエルFRB議長会見でも、「次の一手はデータ次第」と米利上げの一時停止を想起させるような内容であったことから、ドル/円は109円ちょうど近辺のストップロス巻き込みながら108.81円まで続落した。31日、前日の海外時間の流れを引き継ぐと、東京時間に本邦輸出企業の月末円転フロー等も相俟って108.70円までじり安。欧州時間に入ってもドルの軟調地合に変化なく、ドル/円は一時週安値となる108.49円まで値を下げた。しかしその後は、米住宅関連指標が事前予想比良好な結果となったことや、ライトハイザー米通商代表が対中交渉を継続する旨をコメントしたことでドル/円は108円台後半まで反発した。2月1日、米1月雇用統計は非農業部門雇用者数変化が市場予想を大幅に上回った他、米1月ISM製造業景気指数や米1月ミシガン大学消費者信頼感が市場予想を上回ったことを受けて、米金利の上昇とともにドルにショートカバーが入り、ドル/円は109.58円まで上昇し、同水準で越週した。

今週のドル/円相場は方向感に乏しい展開を予想する。先週のFOMCにて改めて米金融正常化が足踏み状態となることが確認されたことは、株やエマージング通貨等のリスクアセットに対してポジティブとなり円売り材料となる一方、米金利上昇が見込みづらいことからドル売り材料と見ることもできる。したがって、ドル、円ともに主要通貨の中で弱い部類となることが予想され、次なる材料待ちでドル/円相場は方向感が出にくいと予想する。もっとも、FRBのハト化に加え、先週発表された米経済指標も総じて悪くない内容だっただけに、市場のリスクセンチメントはやや改善しており、ドル/円のダウンサイドへの警戒感はやや和らぎそうだ。

今週は、米国債入札が複数予定されている他、5日(月)米11月貿易収支、6日(火)米1月ISM非製造業指数、7日(金)パウエルFRB議長講演等が予定されている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(1/28~2/1)の値動き: 安値 108.49 円 高値 109.75 円 終値 109.49 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1300 ~ 1.1500 124.00 ~ 126.50 円

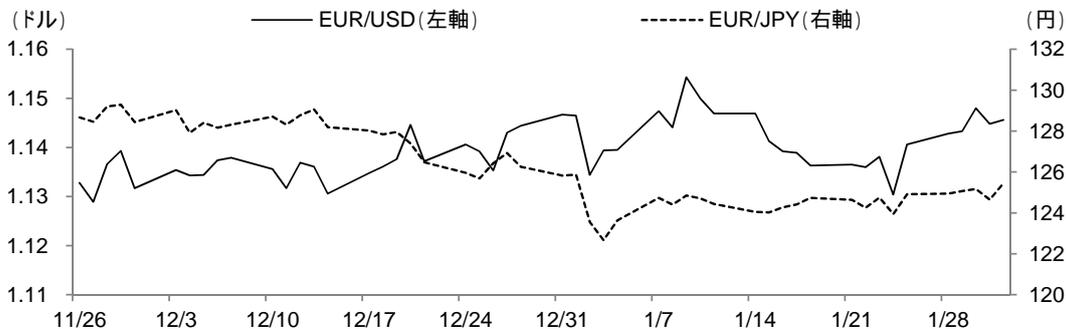
### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは小幅に上昇する結果となった。週初28日、1.1400付近で取引を開始したユーロ/ドルは特段材料が無い中、週最高値1.1390まで下げる場面も見られたが、すぐに1.14台を回復。その後、ドラギECB総裁が「ユーロ圏経済は予想よりも軟調になっており、世界的な不確実性が経済心理の重しになっている」と発言する一方で「現時点ではこうした緊急事態が現実のものになっていない」とも述べ、刺激策は必要ないとの見方を示したことからユーロ/ドルは底堅い展開となり、29日にかけて1.1450まで上昇。しかし30日、米1月ADP雇用統計が予想対比良好な結果となったことからドル買いの展開となり、1.1406まで反落。注目のFOMCでは声明文で「バランスシート正常化の調整を準備する」とし、パウエルFRB議長の会見も同様にハト派な内容になってことから米金利が低下、ドル全面安の展開にユーロ/ドルは1.1501まで急騰。その後もドル売りが継続する中、31日にかけてユーロ/ドルは週最高値1.1514まで続伸するも、イタリア10~12月期GDPが2四半期連続のマイナス成長となったことに加え、ユーロ圏10~12月期GDPが2014年以来の低水準となったことからユーロ/ドルは1.1435まで下落。2月1日、米1月雇用統計は強弱入り混じる結果となったことでユーロ/ドルは上下動する場面も見られたが、発表前と同水準で推移。その後、米1月ISM製造業景況指数が予想対比良好な結果となったことからユーロ/ドルは1.1448まで下落するも、FRB高官のハト派発言でドル売りの流れとなり、1.1488まで反発。結局、1.14台半ばで越週した。

今週のユーロ/ドルは軟調推移の展開を予想する。まずユーロ圏の経済指標が悪化している印象だ。上述の通りイタリアは2四半期連続でのマイナス成長となっており、リセッション入りの懸念が生じている。また31日に発表された独12月小売売上高も予想前年比+1.5%に対し実績同▲2.1%と予想対比大きく悪化した。ドラギECB総裁もユーロ圏経済が予想よりも軟調になっていると指摘しており、实体经济の弱さはユーロ売りに繋がるだろう。またメイ英首相は既に合意している離脱案の修正をEUに要求する可能性が高い。英国議会内での調整が済んでいない中、具体的に英国とEU間で合意に関するヘッドラインが今週中に出てくる可能性は低いもののEUは修正することに否定的な見方を示していることから、同問題は引き続きユーロの上値を重くしよう。ユーロ圏の实体经济への警戒感とBrexit交渉を巡る不透明感から今週のユーロ相場は軟調推移の展開になると予想する。今週の重要指標は4日(月)にユーロ圏2月センチックス投資家信頼感、5日(火)に独仏欧の1月マークイットサービス業PMI、7日(木)に独12月鉱工業生産の発表が予定されている。

### (3) 先週末までの相場の推移

先週(1/28~2/1)の値動き: (対ドル) 安値 1.1390 高値 1.1514 終値 1.1453  
(対円) 安値 124.39 高値 125.73 終値 125.43



(資料)ブルームバーグ

### 3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.3000 ~ 1.3200 142.00 ~ 145.00 円

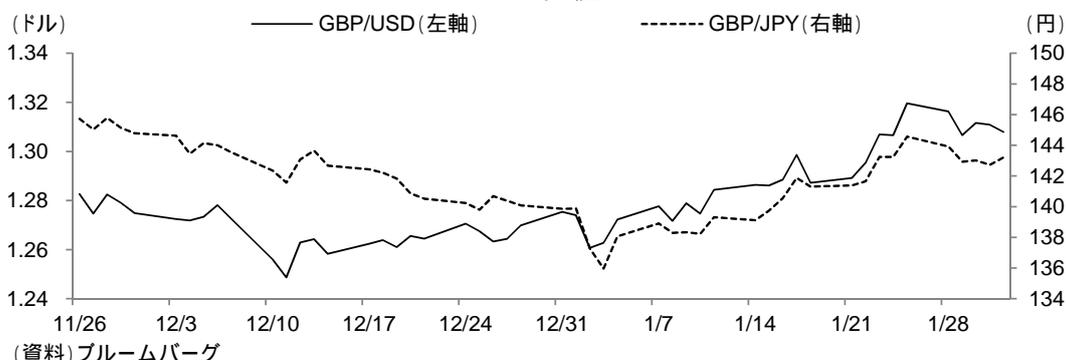
#### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、主要通貨に対して全面安。対円、対ユーロで前週(1月21日~25日)の上昇分の半分ほどを吹き飛ばした一方、対ドルでの反落が限定的にとどまったのは、米側の要因によるドル安が並行した結果。29日、英下院は、英のEU離脱合意に対する複数の修正案を採決した。最も注目を集めた、野党労働党のクーパー議員らが提出した、「2月26日までにEUとの合意が可決されなかった場合、議会在政府に離脱期限(現状3月29日)の延長申請を強いることを可能にする」修正案は、298票対321票で否決された。前週のポンド堅調は同修正案の成立を織り込みながら進んだとの認識が広く共有されていたはずで、予想外の否決はポンド売りの大きな圧力になると警戒されていたが、ポンドは水準を小幅切り下げた程度。その後、与党保守党ブレイディ議員提出の修正案(政府修正案)が317票対301票で可決され、ポンドは一段と水準を切り下げたものの、値動きは緩慢なものにとどまった。ブレイディ議員の修正案は、アイルランド島問題を巡るバックストップ(英全土が関税同盟に残留し、北アイルランドは一部単一市場にも残留する方針)に関し、EUに対して新たな代替策を要求するという内容だったが、同案可決直後から、EU側からは、「交渉再開は有り得ない」「合意内容の変更には応じない」といった発言が相次いだ。この間のポンド安を、離脱期限延長期待の高まりを追い風に進んだポンド高の調整的反落と位置付けること自体に違和感はなかったものの、結局、その割にポンドの下げ足が鈍かったとの印象は拭えなかった(後述)。対ドルでのポンド反落が限定的にとどまったのは、30日の米連銀公開市場委員会の声明が、利上げや資産縮小の打ち止めを示唆したとの読みで、ポンド安と並行して、ドルが全面安に振れた影響だった。

今週の英ポンド相場は、方向感の交錯した小動きを予想。まず、離脱期限延長を巡る思惑だが、クーパー議員らの上述修正案が否決された直後から、現地報道などでは、「2週間後には可決される可能性が高い」といった見解が聞かれた。メイ首相がバックストップの再交渉に臨んでも、結局、修正は難しく、2月14日に予定される採決で、再び離脱合意は否決される可能性が高い。離脱期限が刻々と迫る中、次回こそは期限延長に対して十分な支持を集められるといった思惑だ。実際、31日以降、ハント外相やジャビド自治相ら主要閣僚が期限延長に前向きな姿勢を示したとの観測が広がっている。離脱期限延長は、合意なき離脱を回避するための時間稼ぎになるとの思惑で、ポンド上昇要因と考えられるが、要は、もう2週間、判断が先送りになっただけという読みだ。そんな宙ぶらりんな状況で、ポンドが明確な方向感を打ち出すとは考え難い。また、金融政策の正常化を巡る米連銀公開市場委員会の姿勢豹変には、確かに意外感が強かったが、現状であくまでも「様子見」であり、「データ次第」である点に何の変更もない。利下げの可能性まで取沙汰を始めた市場の反応が拙速に過ぎる感は否めず、1日の米1月雇用統計のような、米経済の底堅さを示す経済指標が示されれば、当然、軌道修正からの軌道修正も想定されよう。米連銀金融政策動向を巡る思惑の不透明感も、方向感の交錯を予想するもうひとつの要因と言える。他に、英固有の要因では、7日(木)に予定される英中銀金融政策委員会の決定や四半期インフレ報告書の発表が注目されるが、英中銀こそ、英のEU離脱交渉の経緯を見守りながら、様子見を決め込む以外に身動きが取れない状況で、ポンドの方向感に影響するような決定/声明/発言などはまず期待できないだろう。

#### (3) 先週までの相場の推移

先週(1/28~2/1)の値動き: (対ドル) 安値 1.3044 高値 1.3214 終値 1.3082  
(対円) 安値 142.08 高値 144.74 終値 143.22



## 4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7100 ~ 0.7450 78.00 ~ 81.00 円

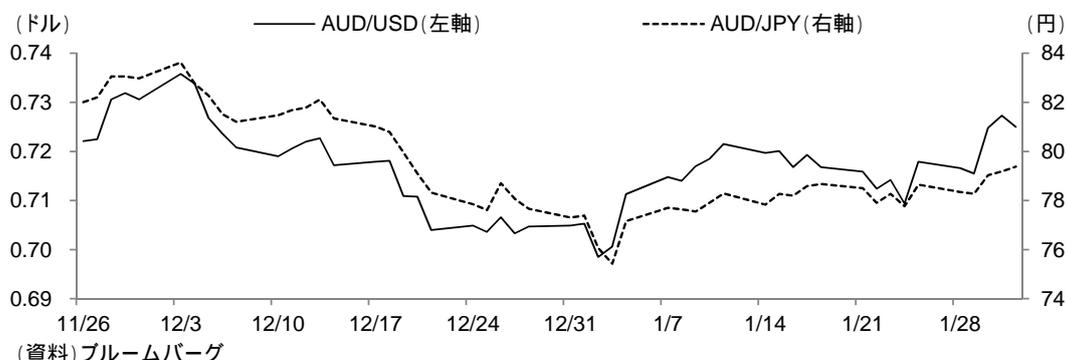
### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、堅調な推移となった。28日は、豪州祝日で閑散相場の中、0.71後半でオープンし高値0.7204まで上昇。しかし、海外市場では上値0.7200近辺で塞がれ米国株式下落の中0.71後半へ小緩んだ。29日は、0.7165近辺でオープン、翌日のFOMCの発表を控え動きがたい様相となり総じて0.71前半から0.71後半での取引に終始した。30日は、0.7150近辺でオープン、豪第4四半期消費者物価指数は市場予想より0.1%高い年率1.8%の結果を受け0.71後半へ押し上げられた。また、大手企業による鉄鉱石の減産計画の報道を受け鉄鉱石価格が急上昇、豪ドルは夕方16時に0.7200近辺で取引された。その後注目のFOMCがハト派な内容となる中、米ドル売り圧力が強まり0.7273まで急上昇し0.72半ば引け。31日は、0.7250近辺でオープン、中国1月製造業PMIの結果は豪ドルへ大きな影響に至らず0.72半ばでの商いとなった。海外市場ではバイマン独連銀総裁のドイツ景気減速は従来より長期的になるとの発言は注視される中、引続き米国利上げ様子見姿勢の流れから豪ドルは0.7300手前まで上昇し0.72後半クローズ。1日は、0.7270近辺でオープン、予想より弱い中国1月Caixin製造業PMIを受け0.72半ばへ小反落した。海外市場では0.72半ばで保合いの後、良好な米1月雇用統計や、米1月ISM製造業景況指数を受け0.72半ば~0.72後半で取引され結局0.72半ばで取引を終えた。

今週の豪ドル相場は堅調な推移を予想する。足許インフレ指標を含め、悪くないものが散見されており、オーストラリア国内経済という意味では懸念は少ない。注目は米中関係であるが、米中通商協議の期限は2月末であり、足許で目立った進展はないであろう。しかしながら、米国も中国も株価がグローバルに軟調に推移する中、対立を激化させたくないという思惑は同じであり、先月等を比較して、両国の関係に歩み寄りの姿勢がみられており、こういった状況も豪ドルをサポートするであろう。今週の注目イベントという意味では、5日(火)に、豪RBA金融政策決定会合が予定されている。こちらは市場予想通り政策金利は据え置きであろう。また、8日(金)については、RBA議事録が予定されており、こちらでは2021年6月までの物価見通しが公表されるが、足許のインフレ状況等を鑑みると、やや強めの内容となる可能性もあるのではないだろうか。テクニカル的には、200日移動平均線レベルをクリアに抜けるか否か、そして節目の0.73がポイントとなるであろう。

### (3) 先週までの相場の推移

先週(1/28~2/1)の値動き: (対ドル) 安値 0.7138 高値 0.7295 終値 0.7248  
(対円) 安値 77.96 高値 79.61 終値 79.38



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。